第12回国際日本文学研究集会研究発表（1988.11.11）

鷗外文学における眼差し

Manazashi in Mori Ogai's Literature

谷　学謙*

In the present paper, the term *manazashi* is used in a broad sense including not only expressions of the eyes, or ways of regarding something, but the thinking behind the use of such expressions, as well. It is apparent to the reader of his fictive works that Ogai is careful in the description of the *manazashi* of his characters. The author of a Japanese study on the functions of *manazashi* in social relations states that Japanese people tend to be sensitive to the line of vision and to avoid eye contact. The characters of Ogai's novels, however, look steadily, or directly, staring and sometimes glaring at others or at each other, and thus evidently represent highly individualized persons. This is the characteristic of *manazashi* in Ogai, viewed from the exterior.

The thinking implicit behind Ogai's use of *manazashi* falls into two categories : that of the gaze which comprehends social life, and that of the gaze which imagines distant places, follows dreams or is introspective.

Examples of the former category : the gaze of Toyotaro, the hero of

* GU Xue Qien 東北師範大学教授。著書に「森鷗外伝」「夏目漱石」「与謝野晶子」などがある。

Maihime, when he first comes into contact with western civilization; Toyotaro's gaze when he awakens to his "true self" and to the beauty of Elise and his love ; the all-comperhending gaze of Koizumi Jun'ichi, hero of *Seinen*, etc.

Examples of the latter : the introspection of Jun'ichi in his diary, and his view of the future and present, or the cold eye of Hanafusa in *Kazuisuchi-ka*.

Another form of *manazashi* in Ogai is that of the author himself intervening in his historical narratives to describe the process and results of his research, his expectations and rewards.

Ogai seems to have been satisfied that he had discovered an ideal model for human existence and perfected a new creative genre in the historical biography. Still, he continues to pursue dreams and phantasies.

1．炯々たる目

鷗外の「妄想」を読んで、特に老翁の「炯々たる目」に強く引かれる。

> その翁の過去の記憶が、稀に長い鎖のやうに、刹那の間に何十年かの跡を見渡させることがある。さう云ふ時は翁の炯々たる目が大きく睜られて、遠い遠い海と空とに注がれてゐる。(「妄想」)

刹那の間に展開される無意識の深層から浮び上ってきた過去を観て、未来に限りなく強い希望を抱いて輝く眼差しである。変転極りなき現象を超えて、ひたすら永遠なもの本質的なものを求め、見極めようとする眼差しである。これを読むごとに襟を正さずにはいられない気魄を感じる。

目は心の窓あるいは心の鏡と言われているが、鷗外の他の作品にもこの眼差しが光っており、その主人公たちの目にも深い理性と思想が輝いているのを見ることができる。例えば「カズイスチカ」の花房学士の病人を視る「冷眼」は理性の目である。

一体医者の為めには、軽い病人も重い病人も、贅沢薬を飲む人も、病気が死活問題になってゐる人も、均しく是れcasusである。casusとして取り扱って、感動せずに、冷眼に視てゐる處に医者の強みがある。併し花房はさういふ境界には到らずにしまった。花房はまだ病人が人間に見えてゐるうちに、病人を扱はないやうになってしまった。そしてその記憶には唯curiosaが残ってゐる。(筆者注　casusは臨床例、出来事。curiosaは知識欲。知的好奇心。)(「カズイスチカ」)

これは人間的な現象に惑わされることなく、臨床の実例として科学的に客観的に視る目である。ここでは医学者特有の「冷眼」として表現されているが、それは鷗外の体験に即した事物を冷静に観察する客観的な目であると同時に、知的好奇心に輝く理性の目でもあると見ていいと思う。このような目は鷗外の作品各所に光っており、その目の光を解くことが鷗外文学を理解する重要な一つの鍵になるのではないかと思う。

2．社会と人生を領略する眼差し

井上忠司著の「まなざしの人間関係」によれば、日本人は視線に敏感で視線を避けるのが普通だと言っていた。しかし鷗外の作品の主人公たちは人の視線を恐れずに堂々と正視する、直視する、時には凝視する、じっと見る、あるいは互にじっと見る。例えば「舞姫」の中の豊太郎とエリスが始めて会った時、あるいは「阿部一族」の中の阿部弥一右衛門が主君忠利公に殉死を願う時、みな互にじっと見た。個性の強い人ばかりである。これは外面から見た眼差しの特徴で、本文では深く立ち入らないことにする。

鷗外作品の主人公たちの眼差しに表われた内部の思想と感情について追究していくと、先ずそれは社会人生を領略する目であることが分かる。

「舞姫」のドイツ留学生太田豊太郎がベルリンに来て始めてさんらんたる西洋文化に接した時、先ず目に訴えた。

何等の光彩ぞ、我目を射むとするは。何等の色沢ぞ、我心を迷はさむ

とするは。(「舞姫」)

先ず「目を射る」「光彩」と「心を迷は」す「色沢」に魅了せられ、次に街と街を行く男女の活気溢れる姿に「目を驚か」され、馬車・楼閣・噴水・ブランデンブルク門・凱旋塔神女像・緑樹など「あまたの景物目睫の間に聚まり」て「応接にいとまな」かった。けんらんたる西洋文化に驚き、自由に積極的に吸取し領略していく目である。

豊太郎の目は漢文と文語的教養によって培われ、その克己的な儒教倫理の目から見れば、それらの外的美観も「あだなる」ものであって、国から与えられた使命感に満ちた「心をば動さじ」と誓ったものである。しかし「自由なる大学の風に当」って心の中に潜んでいた「まことの我」に目覚め、昨日までの所動的機械的人物になる道の非を悟った。西洋文化の美に驚いた目が西洋の学術と思想に転じ、自分の心の深層を見つめるに至る。自由と自我に目覚めた理性の目、同時に旧きものを批判する目でもあった。

更にその目覚めた目がドイツ少女エリスを見て「この青く清らにて物問ひたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは、何故一顧したるのみにて、用心深き我心の底まで徹したるか」に驚くのである。

エリスが泣いて訴える時、「我眼はこのうつむきたる少女の顫ふ項にのみ注がれたり」。「その見あげたる目には、人に否とはいはせぬ媚態」を見出した。この宿命的なめぐり合いの瞬間に異国の女性に美を発見し、愛に目覚めたのである。エリスもまた「わが黄なる面を打守り」「真率なる心」を持つ「善き人なり」と見た。

豊太郎から見れば、二人の交際は「余所目に見るより清白なりき」。しかし、この「余所目」が恐しく、遂に二人を窮地に陥れるのであるが、豊太郎はそこまで考え及ばなかった。彼にしてみれば、エリスの愛と立身出世の道との両立を得て、東西文化を結合する理想を実現させたかったが、それを受け入れるほど当時の日本社会は進んでいなかった。彼も西洋の文化と思想を受け入れて近代的な自我に目覚めたのであるが、その目で日本の現実社会と

自分の社会的地位について深く認識するほど目が成熟していなかった。開化時代の啓蒙的な先駆者の早熟な目であるが、自分の国と社会の「余所目」のきびしさに認識が足らず、現実社会に適応するには弱かった。総じてみれば、「舞姫」の目の付け所は西洋文化の真摯な吸収と東西文化結合への意向及びその挫折にあるように思う。

「青年」の小泉純一は社会に出たばかりの純潔な青年で、「卵から孵ったばかりの雛のやうな目をしてゐる」。その「無垢の自然を其儘のやうな目付」「曇のない瞳」で「珍らしい外の世界を覗いてゐる」。能動的に様々の人物に接し、色々の思想を閲歴していく。

小泉と大村との間には友情以上の同性愛的な感情が動いている。大村は「純一の笑ふ顔を見る度に、なんと云ふ可哀い目付きをする男だらう」と思う。小泉も自分の美貌を意識して「己の目で或る見かたをすると、強情な年長者が脆く譲歩してしまふ」のをむしろ喜んでいる。しかしやはり高尚な思想の交流が多く、純一が「大きい涼しい目を輝かせて」大村から所謂利他的個人主義の説を拝聴して栄養として吸収している。先輩に見くびられまいと精一杯背伸びしている若々しい姿勢であるが、更に目に付くのはその己を持してすべてのものを領略していく知的好奇心と純粋なものを求めてやまぬ理性の目であり、非功利的な批判の目である。

しかし、純一にもやはり若さ故の未熟さと未経験の弱さがあり、そのために女性の「謎の目」に強く引かれる。隣の雪江の「容赦なく睜いた目は、純一が宮島へ詣ったとき見た鹿の目を思ひ出させた」。その若々しい挑むような目に引かれる。芸妓のおちゃらは「瞳に緑いろの反射のある目で」「笑ふことの出来る女で」その愛嬌のいい笑の目にも引かれる。道で通りすがりの三枝茂子の「稲妻のやうに早い、鋭い一瞥」をも捉えて、「いかにも鋭敏らしい目ざし」と見て、その若いながらも利害打算に長けているしたたか者の目を見破っている。

最も強く引かれるのは坂井夫人の「謎の目」で、その「目の奥の秘密が知

りたいのだ」と思って再度訪問した。

鷙鳥や猛獣の物をねらふ目だと云ひたいが、そんなに獰猛なのではない。Nympheといふものが熱帯の海にゐたら、こんな目をしてゐるだろうか。……さういふ感じをいよいよ強めるのは、この目に丈ある唯一の表情が談話と一致しない事である。口は口の詞を語って、目は目の詞を語る。謎の目を一層謎ならしめて、その持主をSphinxにする處はここにある。……奥さんの目の謎は伝染する。その謎の詞に己の目も応答しなくてはならなくなる。(「青年」15)

知らない内は「謎の目」に魅了せられるが、一旦接触してみれば淫婦の目に過ぎない。しかも人の命を落とすニンフの罪な目である。純一は好奇心に駆られて追求したところが、苦い体験をさせられる。しかしそれをも乗り越えて、人生を領略する体験として成長していく。

いよいよ書かうと思ひ立つと共に、現在の自分の周囲も、過去に自分の閲して来た事も、総て価値を失ってしまって、咫尺の間の福住の離れに、美しい肉の塊が横はってゐるのがなんだと云ふやうな気がするのである。紅が両の頬に潮して、大きい目が輝いている。(「青年」24)

理性と意志によつて肉欲不倫を乗り越えて大きく成長していく。苦痛の体験が人生を豊かにし、創作の心を呼び起す。苦痛の傷痕は残っているが、一段と高い境地に達した勝利と創作の喜びと決意に輝く眼差しである。

「青年」において己を持して人生を領略していく知的向上心に富んだ理性的な知識人青年像が打ち立てられた。その着眼点は人生社会の認識と体験を通じての成長と精神の向上にある。

「普請中」の渡辺参事官は二十年後の太田豊太郎の変身とも見られているが、その変りようは目を瞠らせるものがある。東京の例の精養軒で昔のドイツ女性と落ち合うところは劇的なシーンである。

女は、附いて来て戸口に立ち留まってゐる給仕を一寸見返って、その目を渡辺に移した。ブリュネットの女の、褐色の、大きい目である。此

の目は昔度々見たことのある目である。併しその縁にある、指の幅程な紫掛かった濃い暈は、昔無かったのである。(「普請中」)

一瞬心の深層に奥深く秘めていた女のイメージをその最大の特徴である「褐色の、大きい目」にぴたりと合ったのを見出した時の気持。あの目だ。昔のままの大きい目。親しみ合った愛の眼差しだ。その目の縁にある濃い暈は二十年の歳月が残した辛酸と苦難の跡を物語っている。若くて美しかったエリスの悲運を思い合わせると、いたましいばかりの感慨を呼び起こすであろう。渡辺は女の愛の誘いを「ここは日本だ」と口先では拒絶したものの、それは現在の日本の実状では出来ないというだけの話で、内なる感情の自然の動きは少しも否定していない。全体として再会の時の無量の感慨を最大限度に抑制した表現を取っている。昔の女に対しても仮面を脱ごうとしないのが不自然であり、惜しまれる。「普請中」の時代と渡辺の社会的地位が作者にそういう構想と表現を取らせたのであろう。そこに依然として国と社会の「余所目」の冷たい威圧が感じ取られる。それにしても女のなつかしくもまたいたましい目の表情はすべてを語っている、変らぬ愛を語っている。

渡辺は昔の豊太郎のように西洋にあこがれ、東西文化の結合の夢を見ることもないが、その代りに豊太郎に欠けている日本の近代化と自分の地位に対する現実感覚は確実である。「日本はまだ普請中だ」「日本は芸術の国ではない」という判断も日本の近代化の未完成を認め、西洋と日本との差を痛感しつつも、同時に西洋文化を相対化し、日本の近代化の未来に希望を抱いていることを表している。渡辺は現体制の中堅有能な官吏として活躍しているが、自分でも現実的なフィリステルになりすましていることを自覚している。女の前でも遂にその仮面を崩さなかった。即ち本当の自己がそこに用がないのであって、そこにいないのに等しいのである。しかし仮面を意識していること自体やはり己を失っていないことを意味しているのではないか。近代化の現実には妥協的で漸進的改良を認める諦念は、より広い視野から現実を見る目であって必ずしも希望と己を失ったわけではないのである。

「かのように」の主な内容はドイツ留学の少壮歴史学者五条秀麿と洋行帰りの画家綾小路との対話によって展開される。秀麿は神話は歴史ではないという虚構性を認めた上で天皇制を維持するのに必要なその存在価値を「かのように」哲学に求めている。彼は「目の縁がぽっと赤くなって」、その「目の奥にはファナチスムの光に似た、一種の光」をたたえていた。熱狂して自説を説くが、解決の道が見出されない絶望に悩んでいる目である。綾小路は「冷やかに見て」一も二もなくそれを否定する。そして秀麿の「そんなら君はどうしてゐる」という反問に対して、「八方塞がりになったら、突貫して行く積りで、なぜ遣らない」と逆に責める。「目は一刹那鋼鉄の様に光った」が、それは一刹那しか持続しない絶望的な猪突に過ぎない。しかもそれは秀麿を詰問するだけで、自分はもとよりそんな無謀なことは考えて見たわけではなかったのである。それに対して秀麿は「又目の縁を赤くして」、ただ「父と妥協して遣る望はあるまいかね」と未練がましく繰り返すだけである。この「父」は家と国の目を代表するものと見るべきで、その目には勝てないのである。

二人は目と目を見合はせて、良久しく黙ってゐる。山の手の日曜日の寂しさが、二人の周囲を依然支配してゐる。(「かのように」)

秀麿は空想的妥協政策「かのように」に頼り、綾小路は避けて通るかあるいは突貫していくかを豪語しているが、権力の厚い壁の前では目を見合わせるだけで、誰も断固とした解決策はない。理論ばかり空回りして行動の伴わない知識人の無力、そして強権の前では近代的な合理精神と批判精神の限界が空しくさらけ出されているのを感じている。見合わせる二人の目には活路の見えない孤立無援に悩む色がありありと現われていた。

以上述べたのは、西洋と近代化日本・人生と社会・愛情と性・友情と同性愛・権力と個人などの問題を見る眼差しであるが、その共通的なものは己を持してすべてを領略する主体的な批判的な態度である。その目が次第に成熟して現実的になり、漸進的あるいは妥協的になっていくのが見られる。

3．自己を見つめる眼差し

鷗外作品の主人公たちは勿論外部の世界ばかり見ていたわけではない。「舞姫」の豊太郎からすでに自分の心の深層を見つめていた。三年勉学に努め自由の風に当って、心の中穏やかではなく、「まことの我」が深層から現われて、「人の好尚」の「包みがたき」を悟る。今まで進んできた立身出世の道は家と国から押しつけられたもので、自分の受身な態度と機械的な人間に過ぎないことの非を悟った。「好尚」とは今まで押しつけられていた道は自分の意志と好尚によって選んで進んだわけではないことに嫌悪を感じ反抗することである。他方同時に強制要求された道に押えられて深層に沈んでいた「まことの我」が浮んで真の「好尚」に従うのである。

しかし悲劇的な結末に終り、「まことの我」は再び押えられて沈み、要求された立身出世の道を辿っていくことになる。「されど我脳裡に一点の彼を憎むこころ今日までも残れりけり」。怨恨は友相沢に対してだけではなく、国に対しても、更に自分自身に対しても感じていたことだろう。

その内省的な傾向は「青年」以後次第に強くなっていく。純一が日記の中に生活についての省察を残している。

> 一体日本人は生きるといふことを知ってゐるだろうか。小学校の門を潜ってからといふものは、一しょう懸命に此学校時代を駈け抜けようとする。その先きには生活があると思ふのである。学校といふものを離れて職業にわり付くと、その職業を為し遂げてしまはうとする。その先には生活があると思ふのである。そしてその先には生活はないのである。
>
> 現在は過去と未来との間に劃した一線である。此線の上に生活がなくては、生活はどこにもないのである。(「青年」10)

立身出世の道をひた走りに走っていく日本人の人生、自己を失った機械的・受動的な人物を批判したものである。本当の生活はこの道の先に幸福が得られるような未来にはなく現在にある、現在の人生を領略していくことだと反省している。

ここでは未来の夢には生活がないと否定しているが、それなら夢を見ることはむだであるのか。それは夢の内容の違いによると思う。受動的な人生の未来には本当の生活がなく、むだな夢しかないが、現在の人生を領略することによって一歩一歩近づく未来の夢はまた見るべきではないか。従ってここでは未来の夢は何か、現在の生は何か、などについてはっきり理解したわけではない。また未来を夢見て現在をないがしろにする問題をここに始めて提出したが、解決はしていない。

「カズイスチカ」では花房医学士がこの問題を更に追究している。

> 花房学士は何かしたい事若しくはする筈の事があって、それをせずに姑く病人を見ているといふ心持である。それだから、同じ病人を見ても、平凡な病だと詰まらなく思ふ。……勿論発見も発明も出来るならしようとは思ふが、それが生活の目的だとは思はない。始終何か更にしたい事、する筈の事があるやうに思ってゐる。併しそのしたい事、する筈の事はなんだか分からない。或時は何物かが幻影の如くに浮かんでも、捕捉することの出来ないうちに消えてしまふ。女の形をしてゐる時もある。種々の栄華の夢になってゐる時もある。それかと思ふと、其頃碧巌を見たり無門関を見たりしてゐたので、禅定めいたcontemplatifな観念になつてゐる時もある。兎に角取り留めのないものであった。(「カズイスチカ」)

今まで受動的に立身出世の教育を受けてきた知識人が目まぐるしい近代化の時に自分のいるべき位置はどこにあるか分からない空虚な心象である。自己と自分のいるべき位置をつかんでいないから、人生の意義も目的もはっきりしないのである。しかし近代精神の洗礼も同時に教育と書物から受けているので、漠然たる理想と向上心に燃え、夢を見る。それは悲観的なものではない。虚無的ではない。やはり自分の生の深層を見つめ、価値を志向する内省の眼差しである。

学士は同じ医者の父翁の生活態度を観察比較することによって世代間の差に気付き、父に敬服する。

花房はそれを見て、父の平生を考えて見ると、自分が遠い向うに或物を望んで、目の前の事を好い加減に済ませて行くのに反して、父は詰まらない日常の事にも全幅の精神を傾注してゐるといふことに気が附いた。宿場の医者たるに安んじてゐる父のresignationの態度が、有道者の面目に近いといふことが、朧気ながら見えて来た。そして其時から遽に父を尊敬する念が生じた。(「カズイスチカ」)

花房は熊沢蕃山の書「志を得て天下国家を事とするのも道を行ふのであるが、平生顔を洗ったり髪を梳ったりするのも道を行ふのであるといふ意味の事」(「カズイスチカ」)を思い起して、父の達観の人生態度に有道者の面目を見出した。熊沢蕃山は陽明学者である。王陽明の「伝習録」によれば、「道」は「天理」である、「聖人の道」である。即ち封建道徳の「仁義礼智信」を行うことを基本とするものである。花房翁の「有道」もこの「聖人の道」であろう。

王陽明は「致知格物」によって善悪を知り、善を施し、悪を退け、それによって「天理」実現し、「聖人の道」を行う。これは同時に宇宙の根本の理に通じ、ここに人と天とが合一する。「天理」を人の社会にも行うのである。

花房翁の道も陽明学に源を発したもので、事大小となく「全幅の精神を傾注」するのは即ち「致知格物」によって道を行うことである。「天理」を「事々物々」に施せば「事々物々皆得其理矣」。

花房は翁に及ばない所に気付き、差異を見たが、その本質的な区別をまだ認識するに至らなかった。翁は道を知り、自分の置かれた位置を知ってそれに甘んじている。安心立命の倫理的人生観である。しかし翁の態度は道に適っても医学を発展させることは出来ない。近代化の時代にはもはや適応しないのである。学士は近代医学を学び、近代精神に目覚めつつあるが、近代化時代の日本に自分の位置はどこにあるか、自分の価値を実現する道は何かをまだ見出していない。父の道を発見し尊敬はするが、追随しようとは思わない。道の観念では現在の問題が解けないことを知っているからである。自己

を知らない不安の状態にあるから当然夢を追わずにいられないのである。このような精神傾向は近代化時代の知識人に多かれ少かれよくある病症かも知れない。それ故に「カズイスチカ」というテーマをつけたのであろう。学士はそれらを「カズス(病例)」として「冷眼に視てゐる」。

夢と幻影を追う目は「妄想」では更に「妄想」にまで発展する。壮大な海を前にして老翁は生と死について思索する。始めから大自然の懐の中で自然の脈搏を聞きながら生の深層を見つめる。

> 自然科学のうちで最も自然科学らしい医学をしてゐて、exactな学問といふことを性命としてゐるのに、なんとなく心の飢を感じて来る。生といふものを考える。自分のしてゐることが、その生の内容を充たすに足るかどうだかと思ふ。(「妄想」)

これは翁の若き日ドイツ留学中眠られない夜の思索を回想したものであるが、関心の重点は精確な自然科学よりも生と充実した生の実現にあることが端的に示されている。自然科学の合理的精神では生の深奥の問題はまだ解けないのである。夜の思想・深層の思想はここから始まる。

> 生まれてから今日まで、自分は何をしてゐるか。始終何物かに策うたれ駆られてゐるやうに、学問といふことに齷齪してゐる。これは自分に或る働きが出来るやうに自分を為上げるのだと思ってゐる。……併し自分のしてゐる事は、役者が舞台へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎないやうに感じられる。……勉強する子供から、勉強する学校生徒、勉強する官吏、勉強する留学生といふのが、皆その役である。……此役が即ち生だとは考えられない。背後にある或る物が真の生ではあるまいかと思われる。(「妄想」)

役から役へ追われる彼は国と社会の舞台監督の支配の下に受動的にそのコースを進む。これは「真の生」ではない、その「背後にある或る物が真の生」と考えている。勿論「背後にある或る物」は国と社会ではない。それは「真の生」ではないからである。「真の生」は何か。

此頃折々切実に感ずる故郷の恋しさなんぞも、浮草が波に揺られて遠い処へ行って浮いてゐるのに、どうかするとその揺れるのが根に響くやうな感じであるが、これは舞台でしてゐる役の感じではない。(「妄想」)

「故郷の恋しさ」は「真の生」へのノスタルジアである。心の無意識の深層の根元的なものへの志向と見られる。しかしそこへ触れそうでなかなか届かない。心の満たされない空虚を感じて、そのために哲学の遍歴をする。ハルトマンの無意識哲学などを貪るように読んで生の意味を無意識の世界に求めた。しかし西洋哲学は彼の空虚を満たすことができなかった。

帰国後長年国によって与えられた「日の要求」に没頭し続けなければならなかった。

日の要求に応じて能事畢るとするには足ることを知らなくてはならない。足ることを知るといふことが、自分には出来ない。自分は永遠なる不平家である。どうしても自分のゐない筈の所に自分がゐるやうである。どうしても灰色の鳥を青い鳥に見ることが出来ないのである。道に迷ってゐるのである。夢を見てゐるのである。……なぜだと問うたところで、それに答えることは出来ない。これは只単純なる事実である。自分の意識の上の事である。(「妄想」)

「日の要求」に応じて義務を果すことは「自分のゐない筈の所に自分がゐるやうで」、自分の価値を実現すべき所とは見られない。それは「灰色の鳥」であって、「青い鳥」ではない。長年国の「日の要求」に費された不満と怨念が無意識の底に募る。現在をないがしろにする考えがここでは日の要求に対する怨念に発展する。「永遠なる不平家」は「日の要求」を超えて更に大いなる価値と真の生を求めて夢見る。夢見ることは自分でも意識しているが、なぜそうするのかそれは無意識の深層からの要求であって自分にも分らない。しかし純一と花房がまだ漠然としていた夢の内容は、ここでは真の生を知ることと充実した生を求めることに集中された。そしてその生の意味を無意識の深層に求めている。追究は進んできたのである。

他方では翁もその「謎の解けないと知って、解かうとしてあせらないやうになったが」、しかし棄てて追究しないわけではない。科学の合理的精神では解けないというその限界を見出したのである。

かくして最早幾何もなくなってゐる生涯の残余を、見果てぬ夢の心持で、死を怖れず、死にあこがれずに、主人の翁は送ってゐる。

その翁の過去の記憶が、稀に長い鎖のやうに、刹那の間に何十年かの跡を見渡させることがある。さう云ふ時は翁の炯々たる目が大きく睜られて、遠い遠い海と空とに注がれてゐる。(「妄想」)

刹那の間に過去の記憶が無意識の奥底から浮び上がる。振り返ってみると遺憾なことが多かった。「日の要求」に追われて充実した生を送れなかった。真の生をまだ把握していない。悠々自適のようで、心中必ずしも穏やかならず、安心立命の境地にはほど遠い。

翁は無意識哲学の厭世思想には同調せず、近代精神と科学の合理的精神を信じ、科学の発展に希望を寄せている楽天家である。依然として探求と思索を続けて止まないのである。それ故に「炯々たる目」は心の無意識の深層を見つめ、真の生を探究する理性の眼差しである。同時に永遠な価値の創造によって真の生の意義を実現する夢に燃える眼差しである。

4．考証と探究の眼差し

鷗外は「渋江抽斎」に至ってもう作品の人物の眼を描かなくなった。それは史伝小説の要求するところで、ここでは文学的に人物の目の表情を描くこと少なくなったからであると思う。次に作者が探索調査する者として作品の中に入り、作者の探索の目が至る所に光り、人物の目に取って代ったものと思われる。

抽斎は医者であった。そして官吏であった。そして経書や諸子のやうな哲学方面の書をも読み、歴史をも読み、詩文集のやうな文芸方面の書をも読んだ。其迹が頗るわたくしと相似てゐる。(「渋江抽斎」)

鷗外は抽斎の考証学者として一家を成したことを特に強調し、「わたしのためには畏敬すべき人である」と称した。また趣味の上では「親愛することが出来る」と言っている。自分の理想と好みに合った知識人像を発見した一方ならぬ喜び様である。発見と創作の喜びに輝く眼差しが見えるようである。

> 抽斎は内徳義を畜え、外誘惑を郤け、恒に己の地位に安んじて、時の到るを待ってゐた。……進むべくして進み、辞すべくして辞する、その事に処するに、綽々として余裕があった。(「渋江抽斎」)

抽斎の公私関係において己の分に安んじて、進退を正しく処した安心立命の態度を高く評価した。賞賛と評価の目が含まれていた。

鷗外は抽斎に理想的な人間像を発見し、新しい考証探索の方法による史伝小説の創作に成功した。しかし鷗外は作家であると同時に科学者・学者でもある。創造と科学的な近代精神に燃えている理性の眼差しを持っている。従って永遠な価値を創造する夢はそこに果てることはないはずである。「炯々たる目」は満足の光を放って止まるはずはないのである。

鷗外は以上のように一連の作品において、真理を探究し、自分の価値を実現せんとする理性と理想に生きた知識人像を描いた。そしてそれらの主人公の最大の特徴が眼差しに表われていた。